新日本叢書 9

現代日本語の構造と方向

現代日本語の音声と方言

新・日本語講座 3

監修　波多野完治・岩淵悦太郎・平山輝男・大久保忠利
編集　平山輝男・大島一郎

■ 汐文社

平山　輝男　　東京都立大学名誉教授
大島　一郎　　東京都立大学助教授
馬瀬　良雄　　信州大学教授
奥村　三雄　　九州大学助教授
加藤　信昭　　千葉大学助教授
鏡味　明克　　岡山大学助教授
糸井　寛一　　大分大学教授
中本　正智　　東京都立大学助教授

1975年5月15日

編　者　平山　輝男
　　大島　一郎
編集者　吉元　尊則
発行者　今田　　保
印刷者　吉川　健一

発行所　汐　文　社

東京都千代田区外神田2の1の4
京都市下京区七条河原町西南角

新・日本語講座の刊行について

このことは、どの巻を手に取っても、直ちに感じ取られることでありましょう。読者には、その各章・各節ごとに、「なるほど」「なるほど」とうなずきつつ、頬にほほえみを浮かべて読み進まれることを私どもは期待しております。

そして、一つの巻を読み進まれるごとに、日本語とそのつかわれ方についての知識と振り返りがたっぷりと読者の脳をうるおす、そういう講座をという願いがどの巻にも深くこめられていることを、きっと読み取っていただけるにちがいないと信じております。

一九七四・一一・一

新・日本語講座刊行委員会

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

まえがき

自分が生れ育ったところのことばを、言語形成期の方言と言いますが、これは成人した後でもたいへん懐かしいものです。この方言は頭の中に深く刻み込まれていてなかなか消えません。このことばを自由に駆使できる生活は、たがいにうちとけて、ことばのうえで相手に気がねのいらない気楽な楽しい生活です。

これに対して共通語によらなければならない生活は、人によって程度の差はあっても方言生活よりはいくらか堅苦しく形式張った気分を伴なって親近感に欠け、表現にしても何となくもの足りないという不満を覚えるのが普通です。

しかし、社会生活の範囲が広くなって、他の社会集団と交わるようになると、言語形成期の方言だけでは間にあわなくなって、どうしても日本全国に通じる共通語が必要になります。この共通語は後で身につけたことばですから、言語形成期に頭に刻み込まれた方言ほど懐かしくもなく、微妙な感情表現にも不十分かも知れませんが、日本全国どこの誰にも通じるという点で便利です。

われわれは公けの場で広く相手に訴えるときは、どうしてもこの共通語によらなければなりません。従って現代社会の言語生活では、方言と共通語の両方を身につけて主として私的生活では方言を、公的生活では共通語を、それぞれの場面に応じて適切に使い分けることがたいせつです。

この本では、共通語の音声と諸方言の体系とをわかりやすい表現で説明するよう努力しました。これを熟読すれば、日本諸方言の実態を把握できると同時に、共通語との関連（対応）も理解され、現代日本の国語教育を援け、また言語生活の実際面にも役立つと信じます。

一九七四・一二・二〇

平山輝男

1、日本語とそれをつかって生きる全日本人

わたしたち日本人にとって、日本語は切っても切れない血肉を分けたつながりをもつ、ただ一つの母国語であります。生まれてしばらくしてから、ひとりでにこれを身につけ、主観的には何の不自由もなくつかっておりますので、さてと立ち止まってこの母国語について考えることが一般にはあまりありません。けれど、じつは、日本という社会が、日本語をつかって生活している人たちの協同↑↓分業によって成り立っているということを考え直すとき、日本語のできぐあい（構造）とそのつかい方について、ぜひ、ある時振り返ってみる必要がほんとうはあるのでした。

日本語のできぐあいと、それをつかいこなすやり方に、少しでも欠陥があれば、その人、そして日本社会はそれだけ損失を受けており、しかも本人は少しも気がつかないという悲劇の渦中に自分をドップリとつけてしまっていることになります。

2、日本語のできぐあいとつかわれ方を鏡に

日本語のできぐあい（構造）とそのつかわれ方を一度、立ち止まって、みんなで振り返ってみよう、そういう気持を底において、この講座は刊行されることになりました。

全体の構想と各巻の編集担当者については、監修者の合議で決定し、各巻の構成と専門の執筆者の選定・依頼は各巻編集担当者の独創性にゆだねるという、極めて生成的な合意を貫きつつ、各巻が次々と陽の目を見ております。

目次

第一章　総論

第一節　日本語の音声……平山輝男……一
第二節　日本諸方言の種類と特色……平山輝男……二九

第二章　各地方言の実態と音声上の特色

第一節　八丈方言……大島一郎……四一
第二節　東部方言
(一)　北海道・奥羽方言……平山輝男……六一
(二)　関東方言……大島一郎……八一
(三)　東海・東山方言……馬瀬良雄……一〇三

第三節　西部方言
(一)　近畿方言……奥村三雄……一四七
(二)　四国方言……加藤信昭……一七八
(三)　中国方言……鏡味明克……二〇三
第四節　九州方言
(一)　豊日・肥筑方言……糸井寛一……二三五
(二)　薩隅・諸県方言……平山輝男……二五二
第五節　琉球方言……中本正智……二七六
(一)　奄美・沖縄方言……中本正智……二八五
(二)　先島方言……中本正智……三〇一

第一章　総　論

第一節　日本語の音声

平山輝男

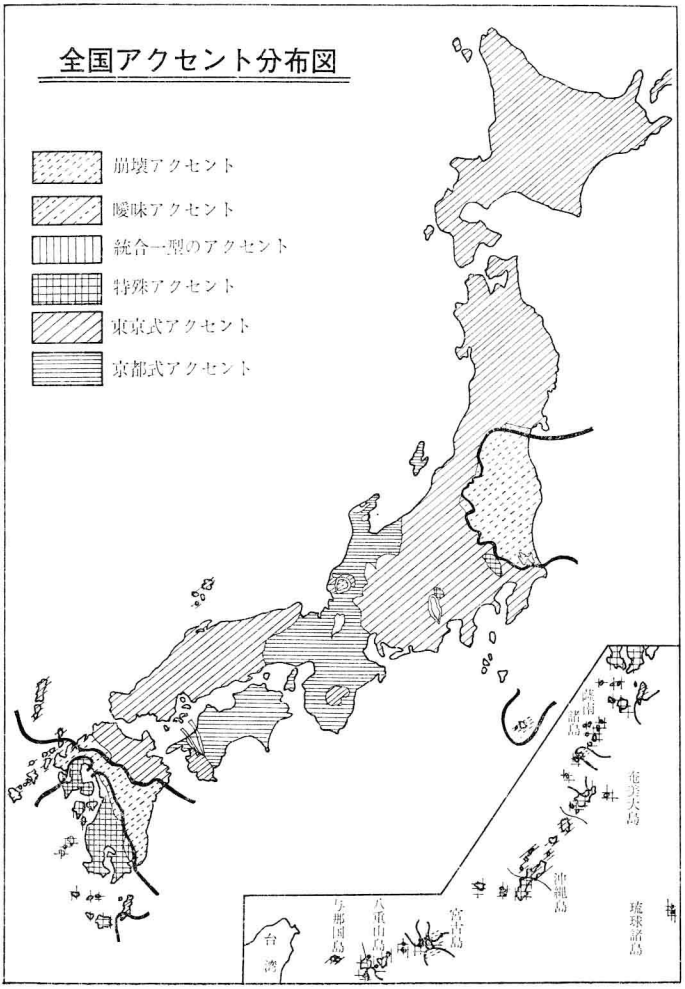
(一)　音声認識の意義

従来、中央語（共通語）の資料を中心にして解説した国語学概説や国文法の類はかなりありますが、広く日本語全体（諸方言を含めて）の音声について、その生きた相を捉えるように書かれたものはほとんどないといってもよいほどです。ところが、この音声の面こそ、言語の最も大切な面を担っています。それは、われわれの現実の言語生活において、語彙でも語法でもすべてこの音声によって表現・伝達の外的活動（思想・感情などは言語の内的活動であって外的活動と表裏一体を成す）を果すからです。従って音声の本質と広くその分布の種々相をはっきり認識することは、日本語の音声学や音韻論の発展に寄与するばかりでなく、語彙や語法の体系的記述を助け、日本語全体の相を科学的に説明することができるようになります。

このような音声を研究する音声学は、音声現象に対して音声の心理学的性質や物理学的構造・生理学的機能などを考慮して観察し、さらに実験的方法をも併用してこれを科学的に究明しようとする学問です。しかし、ここでは、あまりむずかしいことをいわずに、できるだけくだけたことばで平易な説明をすることにします。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

図 1


全国アクセント分布図
崩壊アクセント
曖昧アクセント
統合一型のアクセント
特殊アクセント
東京式アクセント
京都式アクセント
奄美大島
琉球諸島
沖縄島
宮古島
八重山島
与那国島
台湾

さて、一口に現代日本語の音声といっても、諸方言の間でいろいろな違いがあります。例えば共通語の土台をなしている東京方言をはじめ、北海道・奥羽方言や九州方言、その他多くの方言の音声は、それぞれたがいに違った特色があります。われわれ日本人がこれら全日本の音声を正しく認識することは、言語形成期を地方で過した人はもちろんのこと、東京方言の中で育った人々にも日本語研究という立場からはひとしくたいせつなことであり、また国語教育のうえでも重要なことです。

(二)　拍と単音

言語（外的活動）は意義に関係なく観察しますと、音声の連続にすぎないのですが、意義のうえから最小単位とされる単語の場合を考えると、これは一定の基本的な音声上の単位が結合してできていることがわかります。その音声単位を「拍（ハク）」といいます。例えば「桜」は「サ・ク・ラ」の三つの拍が組み合わされてできており、「花」は「ハ・ナ」の二つの拍からできています。日本語では、この拍こそ現実的な音声の最小単位であるといえます。この拍の種類は一定の数に限られています。そして古くからこれをかな一文字で書き表わすことになっています。和歌や俳句などで古くから三十一文字とか十七文字とか、七・五調とかいったのはこの拍の数を表わしたものでした。

現代共通語では、だいたいかなの数に「キャ・キュ・キョ」「シャ・シュ・ショ」のような拗音や長音（「アー・キー・セー」などの延びる音）・促音（「アッ・キッ・セッ」などつまる音）・撥音（「アン・キン・セン」などのはねる音）などを加えたものの総和です。ただし、

ワ行のヰ・ヱ・ヲなどに該当する拍はありません（この拍をもつ方言もいくらかはある）。

日本語のこの拍の構造は、ひじょうに単純です。とくに古代日本語では、一つの母音だけの場合か、一つの子音と一つの母音と結合している場合かであって、拗音や促音・撥音などの類はなかったものと考えられています。現代共通語では、拗音・促音・撥音などが増えていても、なお母音で終る拍（開音節）が多数をしめています。これに対して薩隅方言（第二章第四節(二)参照）などは子音で終る拍（閉音節）を多数持っていて、地方による違いが見られます。

次に共通語の拍をいくつか集めて比較しますと、その拍のうちに共通する部分があることがわかります。例えば「桜」は、sakura、「花」は hana で、そのうち、sa ra ha na は、a（s・r・h・n）で、a が共通です。即ち、a と s・r・h・n に分けることができます。このようにできるだけこまかく分けた音の単位が単音です。つまり単音とは、音声を分析することのできる最小単位です。なお、母音は一単位であって、それだけで一拍をなすわけです（例［ao］青、［ie］家はそれぞれ二拍）。この単音の本来の性質は、強さや高さや長さなどには関係なく、ただに「音質」にあるといえましょう。

それぞれの単音が持つ音色の違いは、心理的事実です。この違いは、それぞれの単音成立の生理的・物理的条件の違いに対応します。ですから、主観的知覚印象だけでなく、発声に際しての生理的・物理的条件を考慮して、すべての単音を組織的に類別していけば、音韻論でいう「音素」が抽象されるわけです。

拍の表（※は共通語以外の方言、または外来語に表われるもの）

dʒ	tʃ	d	t	ʒ	ʃ	z	s	ɲj	gj	kj	ɲ	g	k	子音／母音
dʒa	tʃa	da	ta	ʒa	ʃa	za	sa	ɲja	gja	kja	ɲa	ga	ka	a
dʒi	tʃi	di ※	ti ※	ʒi	ʃi						ɲi	gi	ki	i
dʒɯ	tʃɯ	dɯ ※	tɯ ※	ʒɯ	ʃɯ	zɯ	sɯ	ɲjɯ	gjɯ	kjɯ	ɲɯ	gɯ	kɯ	ɯ
dʒe ※	tʃe ※	de	te	ʒe	ʃe ※	ze	se				ɲe	ge	ke	e
dʒo	tʃo	do	to	ʒo	ʃo	zo	so	ɲjo	gjo	kjo	ɲo	go	ko	o
ヂ ャ	チ ャ	ダ	タ	ジ ャ	シ ャ	ザ	サ	ギ ャ	ギ ャ	キ ャ	ガ	ガ	カ	ア
ヂ	チ	デ ィ	テ ィ	ジ	シ						ギ	ギ	キ	イ
ヂ ュ	チ ュ	ド ゥ	ト ゥ	ジ ュ	シ ュ	ズ	ス	ギ ュ	ギ ュ	キ ュ	グ	グ	ク	ウ
ヂ ェ	チ ェ	デ	テ	ジ ェ	シ ェ	ゼ	セ				ゲ	ゲ	ケ	エ
ヂ ョ	チ ョ	ド	ト	ジ ョ	シ ョ	ゾ	ソ	ギ ョ	ギ ョ	キ ョ	ゴ	ゴ	コ	オ

j	mj	m	bj	b	pj	p	ɸ	ç	h	ɲ	n	dz	ts
ja	mja	ma	bja	ba	pja	pa	ɸa ※	ça	ha	ɲa	na		tsa ※
		mi		bi		pi	ɸi ※	çi		ɲi			tsi ※
jɯ	mjɯ	mm	bjɯ	bɯ	pjɯ	pɯ	ɸɯ	çɯ		ɲɯ	nɯ	dzɯ	tsɯ
je ※		me		be		pe	ɸe ※		he		ne		tse ※
jo	mjo	mo	bjo	bo	pjo	po	ɸo ※	ço	ho	ɲo	no		tso ※
ヤ	ミヤ	マ	ビヤ	バ	ピヤ	パ	ファ	ヒヤ	ハ	ニヤ	ナ		ツァ
		ミ		ビ		ピ	フィ	ヒ		ニ			ツィ
ユ	ミュ	ム	ビュ	ブ	ピュ	プ	フ	ヒュ		ニュ	ヌ	ヅ	ツ
イェ		メ		ベ		ペ	フェ		ヘ		ネ		ツェ
ヨ	ミョ	モ	ビョ	ボ	ピョ	ポ	フォ	ヒョ	ホ	ニョ	ノ		ツォ

w	rj	r		
wa	rja	ra	リャ	ラ
wi ※		ri		リ
	rjɯ	rɯ	リュ	ル
we ※		re		レ
wo ※	rjo	ro	リョ	ロ
ワ				
ヰ				
ウェ				
ヲ				

注1　右の表に示したものの他に、促音（Q）、撥音（N）、長音（E）があります。

2　また方言によっては、例えば薩隅方言などのように子音で終わる特殊な拍もあります（第二章第四節㈡参照）。

3　j・wは半母音という名称もありますが、また性格上子音的面もあって、半子音と呼ぶ学者もいます。この表では便宜上子音の欄に入れ、また本文では半母音と呼んでいる場面もあります。

㈢　共通語と諸方言の音声

例えば奥羽の福島や仙台の方言では、「箸」をハス〔hasü̈〕（アクセントは崩壊アクセント、スの母音は中舌母音）のように発音しますが、東京方言が土台となっている共通語ではハ|シ△〔ha|ʃi〕（アクセントは頭高型、シの母音は無声化）のように発音します。これを教育的に扱うときは、共通語のハ|シ△を標準にします。

現代共通語は、東京方言が土台となってできている言語体系ですが、東京方言そのままの相が共通語ではなく、その中の望ましくない面は削除されます。例えばヒとシが混同して、シロ|イ（白）とヒロ|イ（広）との区別がつかなくなるような現象や、いわゆるベランメーことばの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.